

《《《《《《トピックス》》》》》》

退任のご挨拶

スポーツ医学研究センター所長 **橋本 健史**

スポ研との出会い

私は、2025年3月をもって、慶大スポーツ医学研究センターを退職いたします。皆様、長い間、本当にありがとうございました。私の記憶にあります、慶大スポーツ医学研究センター（以下、スポ研）の思い出をすこし綴っていこうと思います。

2011年初夏、私は慶大月が瀬リハビリセンターにおりました。このリハビリセンターは同年9月いっぱいをもって売却が決まっていた。整形外科部長をしていた私は、この先どうしようかと考えていたところでした。ある日突然、整形外科の戸山教授（当時）から電話があり、「橋本、スポ研はどうだ？」と言われました。「ありがとうございます。それでよろしく願っています。」それが、私のスポ研との関わりの始まりでした。当時、正直な話、スポ研とはどこにあり、どういうことをしているかは、よく知りませんでした。

体育会サポート

2011年10月、私はスポ研に赴任いたしました。勝川前所長と石田先生が階段を駆け下りてきて歓迎してくれたのが印象的でした。それまで、慶大整形外科は、体育会をはじめとした医学部以外の他学部との関係がどちらかというと疎遠でありました。そこで私に与えられたミッションは、“体育会選手の整形外科的なサポートを根底から作る”でした。試行錯誤もありましたが、その後まず、スポ研の皆様と共同し、“体育会救急ケガコンディショニング対応マニュアル”を作りました。重度の疾病、外傷時には、担当コーディネータードクターが24時間電話対応するというものです。2024年までに総計128件の電話対応をいたしました。電話は土、日が多いのですが、どういう症状かをできるだけ詳しく聴取して、すぐに救急車を呼ぶべきか、すぐに救急病院に行くべきか、一晩様子をみてよいか

などを判断して処置を指導します。最も多かったものが脳震盪であり、膝靭帯断裂、肘関節脱臼、肩関節脱臼が続きます。いずれもすぐに救急病院に行く必要があるため、そのように指導いたしました。

日吉キャンパスに一番近い救急病院は済生会横浜市東部病院です。その院長と救急科部長の先生に年に1度は勝川前所長と一緒に“塾体育会選手をよろしく”と挨拶に行きました。救急の選手を病院に行かせる時には、あらかじめ、必ず病院の救急担当のドクターに電話を入れて、選手の状態の概要を説明し、お願いをしておきました。ほとんどの場合、快く受け入れてくださり、感謝しております。

ただ、体育会の練習場所は、日吉キャンパスに限りません。各部ごとに練習場所が異なります。そこで、全体育会の練習場所を調べ、その近隣の慶應系列病院を調べ上げ、そこに勤務している慶大整形医局のドクターに選手の受け入れを頼みました。ありがたいことに、頼んだすべての病院で快く受け入れてくださいました。

また、選手のリハビリテーション・リコンディショニングでは、今井さん、木畑さんにたいへんお世話になっております。ありがとうございます。メンタルの問題では、布施さん、山口先生、女性アスリート外来では、小熊先生にたいへんお世話になりました。循環器系では真鍋先生、体育会全体の問題では石田先生にお世話になりました。ありがとうございます。

さらに、スポーツ障害予防にも取り組みました。FIFAの11plusにヒントを得て、足関節周囲筋力増強を加えた改良版を少しずつですが、各部にひろめていきました。今後も各部に習慣づけられていくとよいと考えております。

第34回 日本臨床スポーツ医学会学術集会

大きな思い出のひとつが、やはり、スポ研の総力を挙げて主催した、2023年の第34回日本臨床スポーツ医学会学術集会で

しょう。勝川前所長が会長となり、私が実行委員長をつとめました。なんといっても日本のスポーツ界のメインの学会であり、みんな気合が入っておりました。勝川会長は“連携と進化”を統一テーマに掲げられ、実行委員会を立ち上げ、私が整形外科関係のメンバーを集めました。今はスポ研にこられた原藤先生も含め、当時の整形外科若手オールスターを集めました。私が考えましたのは、文化講演で、なんとかあつとおどろくような人物を招きたいということでした。2023年のトピックは、何といってもWBCワールドベースボールクラシックでの日本チームの優勝でした。栗山監督さんに出演してもらうことはできないだろうかと考えました。5月の実行委員会で原藤先生から「二木准教授が栗山監督さんの御家族を診ていた」という情報を得て、その関係から依頼すると、なんと承諾していただきました。学会当日、どきどきしながら、栗山監督さんの到着を待ったことが昨日のように思い出されます。学術集会そのものもたいへん評判のよいものとなりました。スポ研の金字塔のひとつとなったと思います。

企業との共同研究

企業との共同研究も思い出のひとつです。それまでは、一整形外科医でありましたので、企業との共同研究などはもちろん経験がなく、新鮮な驚きでした。きつくなったのは、おそらく、NHKの「ためしてガッテン」に出演したことではなかったかと思われそうです。番組が放映された直後に花王から、電話があり、共同研究のオファーがありました。残念ながら具体的な成果は出せなかったのですが、共同研究をどう進めたらよいかというよい経験となりました。その後も、ルシアン、コクヨ、ジンズ、東レ、ユニクロなどいろいろな会社とさまざまな研究をおこなう機会を得ることができました。なかでも、ジンズとは、メガネ型のウェアラブルセンサーを作ることができ、体育会選手の障害予防にも応用することができ、たいへん思い出に残っております。伊藤さん、常川さん、八木さん、萩原さんに日曜日に実験を手伝ってもらってしまったこともありました。たいへんありがとうございました。

慶應箱根駅伝プロジェクト

いつのころからか、競走部の選手を多数、診察するようになり、当時の競走部の監督さんから相談があり、いつそのこと、チームドクターになって、しっかりと選手をサポートしてほしいとのことになり、真鍋先生とともに競走部チームドクターとなりました。

2017年9月17日、体育会競走部が創立100周年を迎え、その記念として、“慶應箱根駅伝プロジェクト”が立ち上がりました。競走部は、1920年の箱根駅伝第1回大会の創業4校（他は、早稲田大学、明治大学、東京高等師範学校）のうちの1校であり、出場30回、1932年には総合優勝もしています。しかし、

1994年第70回大会以来、出場できていません。

一貫校も含めた新人選手の発掘、練習方法の見直し、メディカルサポートの充実、SDGsで有名な蟹江憲史教授（競走部OB）を中心にしたランニングデザイン・ラボの設立など、さまざまな強化策を立ち上げました。私はメディカルサポートを主に担当し、ランニングデザイン・ラボにも主体的に参加しています。2024年の箱根駅伝予選会にも応援に行きましたが、残念ながら、予選を突破することができませんでした（図）。真鍋、原藤先生にバトンを渡しますので、どうかよろしく願います。

橋本ゼミ (動作解析・バイオメカニクス研究室)

ご存知のように、スポ研は慶大大学院健康マネジメント研究科とたいへん密接な協力体制をとっています。私は2017年から大学院研究科委員にさせていただき、修士ならびに後期博士課程の学生の指導をしてきました。同時に、動作解析・バイオメカニクスの講義を大谷俊郎教授とともに担当するようになりました。大谷教授が退職されてからは、私が主担当者となり、講義をしました。また、毎年、スポーツマネジメントの学生、2から3名が私のゼミに入ってくれるようになり、本格的に動作解析実験ができるようになりました。ゼミの学生は真面目で、やる気があり、発想がきわめてユニークで、たいへん楽しい思い出となりました。

ランニング動作解析実験が多いのですが、野球のバッティング動作、短距離のスタートへの睡眠の影響、野球の投球動作、ランニングシューズの働き、ウェアラブルセンサーによるランニング動作解析、足関節不安定症の動作解析、ウェアラブルセンサーによるランニング障害予防、ダンスの動作解析など、多種多様な動作解析を行ってきました。その結果、10名の修士、1名の博士を育てることができました。みんなたいへん素晴らしい研究論文を書いてくれました。企業や大学での今後ますますのご活躍を祈っております。

日吉歩行研究会

私がスポ研に赴任して数年後、若い頃からお世話になっていた理工学部山崎教授から電話をいただき、「せっかく日吉にいるのだから、隣の理工学部に行って、機械工学の萩原直道准教授に会ってみなさい。」と言われました。数日後、伺ってお話をすると、京大霊長類研究所にいたこともあるというたいへんユニークな研究者でした。サル歩行解析をしていて、ヒトの足にもたいへん興味を持っているということで、たいへん話が合い、勉強会を一緒にやってみようということになりました。そして、2014年に「日吉歩行研究会」という勉強会を共同で立ち上げました。歩行と足について、理工学部と医学部の学部横断で語り合うというきわめて貴重な勉強会となりました。



その後、荻原教授が東京大学教授となると、東大荻原ゼミと慶大橋本ゼミとの大学横断での勉強会に発展しました。8名だった参加者もコロナ禍の中止をはさんで、先日、第15回勉強会を開催し、20名を越すようになりました。共同研究も行き、Scientific Reportsに論文もpublishできるようになり、慈恵医大など他大学からの参加者も増え、よい会に育てることができたと考えております。今後は荻原教授が中心となり、ますます発展していくことを祈っております。

日吉スポーツ医科学ミーティング

慶大体育研究所の稲見崇孝先生には、日本臨床スポーツ医学会準備の頃からいろいろお世話になっており、2023年3月頃にお互いのゼミで合同勉強会をやりましょうということになりました。第1回稲見ゼミ・橋本ゼミ合同勉強会を2023年5月15日に開催しました。稲見ゼミの筋代謝、神経系も含めたスポーツの考え方や橋本ゼミの動作解析を中心とした考え方が絡み合っ、きわめて興味深い議論となりました。2人で名称を“日吉スポーツ医科学ミーティング”とし、以後2か月に1度程度で勉強会を開き、2024年12月に第10回ミーティングを開きました。双方のゼミ生にはたいへん勉強になりましたと好評でした。夏、冬には勉強会のあと、ファカルティラウンジで、盛大に納会を行い、それも楽しい思い出です。私の退任後もさらに、発展することを祈っております。

日本足の外科学会

私は整形外科医ですが、なかでも足部・足関節の外科を専門

としております。1986年に国立病院機構東京医療センター勤務となり、足の外科が専門の加藤哲也先生のご指導を仰いだことがきっかけでした。臨床に取り組む姿勢がごりっばで、研究室の明かりは夜1時、2時まで煌々としておりました。私はその加藤先生にあこがれ、足の外科を志しました。研究テーマは、“慢性足関節不安定症の歩行解析”でした。

博士論文を仕上げ、医学博士号を取得し、スウェーデン、ストックホルムにありますがカロリンスカ研究所に留学しました。そこでは、バイオメカニクスの世界的大家のLundberg教授に師事して、足関節の歩行解析を中心としたバイオメカニクスを学びました。研究も楽しかったのですが、世界中のドクターと友人になれたことが大きな収穫でした。

そして、2020年、第45回日本足の外科学会学術集会会長となる機会を得ることができました。スポ研の皆様にも準備段階からたいへんお世話になりました。残念ながら、コロナ禍で、WEB開催とはなりましたが、日本足の外科学会に名前を刻むことができました。

私は現在、一般社団法人日本足の外科学会の副理事長としております。本学会は今年2025年、創立50周年を迎え、秋に軽井沢で祝賀会を行います。私は副理事長として、この祝賀会が成功するように周到に準備を進めていく予定です。

おわりに

皆様、13年6か月間、本当にお世話になりました。慶大には通算で30年、勤務させていただきました。慶大スポ研は、ふだんは、それぞれ個人的に研究、臨床活動をしており、ともすれば、ばらばらの感があります。ところが、何か、学術集会

であるとか公開講座であるとか、目的があると、強力なチームワークで組織化されるという不思議な組織です。素晴らしい組織だと思います。慶大スポ研がいつの日か、世界一のスポーツ

研究センターになることを祈っております。皆様、本当に長い間、ありがとうございました。

就任のご挨拶

スポーツ医学研究センター専任講師 **原藤 健吾**

このたび、2024年12月よりスポーツ医学研究センターに赴任いたしました原藤健吾（はらとうけんご）。よく「はらふじ」さんとか「ふじわら」さんと間違えて言われますが覚えて頂けると嬉しいです。福岡県北九州市の出身です。

私は1999年に慶應義塾大学医学部を卒業し、整形外科医局に入局しました。その後、関連病院での研鑽を積み、2005年にはカナダのウエスタンオンタリオ大学に短期留学し、2014年4月より慶應義塾大学医学部整形外科学教室に帰室しました。臨床・教育・研究のすべてにバランスよく取り組んできたつもりです。専門は膝関節外科であり、特に膝前十字靭帯損傷や半月板損傷の治療、さらには人工膝関節置換術を日々行ってまいりました。膝の機能を最大限に引き出し、スポーツ選手の怪我からの復帰や患者さんのQOL（生活の質）の向上を目指して診療にあたっています。

また、これまでスポーツに関わる医療にも積極的に携わってきました。現在、NECレッドロケッツ川崎（SVリーグ・バレーボール）、横浜グリッツ（アジアリーグ・アイスホッケー）、慶應義塾大学体育会競走部、慶應義塾大学体育会サッカー部、高

砂部屋など、さまざまな競技チームのチームドクターとして活動しています。スポーツ選手の怪我の治療だけでなく、リハビリやパフォーマンス向上のためのサポートにも力を入れ、より安全かつ効果的に競技を続けられる環境づくりを目指しています。

このたびスポーツ医学研究センターに赴任するにあたり、これまでの臨床経験を活かしながら、動作解析を中心とした研究をさらに発展させ、世界に向けて発信していきたいと考えています。スポーツや運動に関わる方々が、科学的根拠に基づいたアプローチでより良いパフォーマンスを発揮できるよう、実臨床への還元を意識した研究を進めていきます。また、教育面では、これまで以上に若手研究者の指導にも力を入れ、次世代のスポーツ医学の発展に貢献したいと思っています。

新たな環境のもと、これまで以上に研鑽を積み、スポーツ医学そしてこのスポーツ医学研究センターの発展に寄与できるよう努力してまいります。皆様のご指導・ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

おもな活動報告

通年 体育会学生対象理コンディショニングチェック
教職員対象運動教室（オフライン、オンライン開催）
諸学校スポーツ相談（橋本先生）
12月 冬季国民スポーツ大会神奈川県代表選手メディカルチェック（11～1月）
体育会アメリカンフットボール部体脂肪率測定
体育会自転車競技部心臓エコー検査、 V_{O_2max} 、乳酸、体脂肪率測定
相撲新弟子心臓エコー・体脂肪率検査（両国）

体育会蹴球部体脂肪率測定
NECレッドロケッツ川崎バレーボール選手心臓エコー検査
1月 外部競技選手メディカルチェック
2月 相撲力士一斉心電図検査（両国4日間）
3月 体育会蹴球部体脂肪率測定、血液検査
体育会アメリカンフットボール部体脂肪率測定
第5回 KEIO SPORTS SDGs シンポジウム 2025(3/15)
体育会アイスホッケー部乳酸測定

Newsletter No.47

慶應義塾大学スポーツ医学研究センター ニュースレター 第47号

慶應義塾大学スポーツ医学研究センター Sports Medicine Research Center, Keio University

発行日：2025年3月31日

代表：橋本健史

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 慶應義塾大学スポーツ医学研究センター TEL:045-566-1090 FAX:045-566-1067 <http://sports.hc.keio.ac.jp/>